

## 平成16年度 受け入れ資料紹介

### 「全自動もみすり機」

現在、ほとんどの家庭では、毎日の食卓に上る「お米」を、お米屋さんやスーパーマーケットから購入しているのではないのでしょうか。そうしたお米は、きれいな乳白色をしていて、さっと水で研げば、あとは炊くだけですぐに食べることができます。また、最近では、研がなくても炊くことのできる「無洗米」と呼ばれるお米も販売されています。

しかし、稲を刈り取れば上記のような状態になっているわけではなく、刈り取ったあとに、いくつかの作業を行った末にはじめて、私たちが口にすることができるようになります。このような刈り取った稲を食べることができるようにするための作業は、かつてはいくつかの行程に分けられていました。

沼津の画家である磯部菊溪が明治11年(1878)に描いた「田舎諸行」には、稲を刈り取ってからの作業の行程が描かれています。そこでは、センバコキと呼ばれる道具を使って稲から<sup>もみ</sup>籾を落とす作業、カラウスという道具を使って籾をすって玄米を取り出す作業、トウミという道具を使って<sup>もみがら</sup>籾殻と玄米を分ける作業、フルイを用いて玄米の大きさを選別する作業、ウスとキネを用いて玄米を精白する作業が生き生きと描写されています。

当時は、エンジンなどの動力が無い時代ですから、これらの作業はすべて人力でおこなわなければならない、稲を刈り取ったあとでも村人が総出で忙しく働かなければならなかったのです。

その後、大正時代末期から昭和初期にかけて、諸外国から入ってきたさまざまな動力を利用した農業機械が次々と開発されるようになりました。そして、戦後にはそれらの機械が全国各地で実際に使用されるようになりました。

今回受け入れた「全自動もみすり機」も、動力を用いた農業機械の一つで、富士市蓼原南本田の部農会の皆さんが昭和24年から昨年まで使用していたものです。この全自動もみすり機は、前述した刈り取り後の作業のうち、カラウス、トウミ、フルイという三種類の道具の持つ機能を一台で備えたものでした。この機械を導入することによって、刈り取り後の作業の効率は飛躍的に向上しましたが、一方でこの機械は非常に高価なものでした。そのため、蓼原南本田の農家の人々は、みんなでお金を出し合っこの機械を買い、交代でそれぞれの家に運んで使っていたそうです。

この資料は博物館に展示されてもう動くことはありませんが、その中にはまだ、お米とお米を作ってきた人々の歴史と思いがいっぱい詰まっているのかもしれない。



『田舎諸行』 磯部菊溪筆

明治十一年（一八七八）

富士市立博物館蔵



歴史民俗資料館に展示される全自動もみすり機